

私たちのシユウカツ
安城特別
支援学校の1年

六月。新型コロナウイルス感染症拡大防止の臨時休校が終わり、安城市の安城特別支援学校に、生徒たちの元気な声に戻ってきた。就職活動に向けた指導の遅れを心配していた教職員らも、学校再開に胸をなで下ろす。企業での実習や就職先でも役立つ力を養う、高等部「年次から始まる授業の一つ「作業学習」。生徒たちは興味や特性に合わせて、六班に分かれて授業を受けている。

(四方さつき)

6月・作業学習 ①



収穫作業に汗を流す
農業班の生徒たち

「長い休校で、体力落ちとるやつがおるなあ。ばてないようになんと水分取るよー」「先生、そ大丈夫ですか」。五日。学校の農



①小物入れを作る木工班の生徒たち
②教員を班の班長とする農業班の生徒たち
③生徒は、安城市の安城特別支援学校で

場。高等部の農業班の生徒と教員の笑い声が響いた。ジリジリと太陽が照り付ける暑い一日。久しぶりにくわを握った生徒たちは汗をぬぐいながら畝を整え、ジャガイモやタマネギ、ニンニクを収穫した。

二、三年生が対象の「作業学習」は、主に木工、窯業、紙工、農業、クラフト、応用縫製の六班に分かれる。授業は週二日、計八

時間。四時間連続の授業で、高等部主事の黒太宣彦で、教諭は「報告、連絡、相談」など、社会人として必要なスキルを身に付けるのに加え、集中力、持続力を付ける目的もある」と授業の狙いを話す。

木工班はふた付きの小物入れ作り。三年生は手順に従い、接着剤で組み立てたり、やすりで表面を滑らかに磨いたり。二年生は教員から作業の進め方や道具の使い方の説明を受けた。担当教員は「整理整頓しながら作業すると、次の仕事がい



やすいよ」「材料に傷が付くと、製品にならない。丁寧に扱おうな」と細かく声を掛けた。

窯業班は小皿作りに取り組んだ。工程ごとに教員のチェックを受ける。粘土を延ばす際に寄った小さなしわも見逃さず「やり直しませう」と自己申告する生徒も。「作業学習で作るのは作品ではなく製品」と黒岩愛里教諭。来年度の作業学習の材料費は、秋の文化祭などで製品を販売したお金を充てる。「誰もが同じ品質の製品を作れるようになるのが目標です」



④役割分担してかごを仕上げるクラフト班の生徒
⑤仕上りのチェックを受ける応用縫製班の生徒



社会人に必要な力養う

手順を理解し、指示に従って作業を進め、分らないことがあれば相談し、ミ

スがあれば報告してやり直す。「企業での実習はもちろん、就職した後にも必要とされるスキルを養います」と進路指導主事の説田智洋教諭は言う。

企業への就職を目指す生徒が集まる学級「職業コース」の二十人は二年次から、作業学習のほかに週に二時間、「サービス」の授業もある。